
New World 外伝 『Another World』

モチゴメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New World 外伝 『Another World』

【Nコード】

N2720Z

【作者名】

モチゴメ

【あらすじ】

MMORPG《New World》

その世界に限りなく近い世界に転生する事になった主人公がいた。

だが、まさか、それがたった一人ってなわきゃねーだろうが！

男は世界をかける。外道に非道に修羅道に。

約束を果たすために。そして何よりも、己の復讐を果たすために。

山あり谷ありチート無し！？ダメ人間の、痛快ロマン復讐劇。

(この作品は池宮樹さん原作の『New World』のスピノ
フとなっております。ご本人の許可と協力を頂いて書かせて頂きま
した。できるだけさくつと読めるような作風にしたいと思っ
ていますので、ご指摘等お待ちしております。)

プロローグ（前書き）

という訳で。書いて見ました、二次創作！
お目汚しで失礼ですが、もし良かったら読んでいってください。

プロローグ

嘘だ。

嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だ！

いきなり立ち上がったからか、立ちくらみ。真後ろに向かって倒れる椅子の音が遠く聞こえる。

平日の午後二時。陽光の入らないカーテンで閉めきった部屋。ワイド画面のブラウン管ディスプレイに照らされたその四畳半。

床一面に即席麺やコンビニ弁当のゴミが散乱し、ゴミ箱からは丸まって変色したティッシュが溢れている。

そんな、あるいみで生活感のあふれる部屋で、一人の男が汚れた長髪越しに光源となるメールの受信箱を覗いている。色濃い隈の浮かんだ瞼を見開き、充血した瞳は瞬き一つしない。節くれだった長い指と汚い爪で頭皮を、頬を掻き毟る。痩せこけて土気色とも青白いとも言えないような色の肌の上に、赤いミミズ腫れが走る。目鼻立ちを整っているのだが、長らく手入れを怠っているのだろう。見る影もない。

おかしい。

どうしてこうなったんだ？

「…………ア、…………っ！…………！？」

男はとっさに声をあげようとして、声帯がうまく動かないことに気

がつく。それはそうだ。覚えている限り、ここ数年誰とも『話して
いない。「温めますか？」にも頷くぐらいだ。
長いことディスプレイに固定されていた視点を、散らかった卓上に
走らせる。いきなりピント距離が変わってぼやけるが、それでもな
んとかマウスを探し当てるとカーソルを走らせる。
高解像度のレーザーマウスは感度が最大に設定してあり、ほんの少
し動かすだけで画面の端から端まで一気に動く。それが災いしてか、
震える手では中々そのアイコンに合わせることができない。

「……ツアあ！」

やっと合わせることが出来ると、そのアイコンを押す。

『更新』

もしかしたら、という希望を持って押しこむ。頼む、頼む。そう願
いながら、しかし何処か諦めている自分がいるのが悔しい。

カチ。

変わらない。

カチカチ。

再び、変わらない。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ
カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ
カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ
カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ
カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

オーガスト。

赤い髪が特徴的で、一部では「八月紅葉」などと呼ばれていたりもした、Sグレードのソードマスター。人数こそ十名にならないくらいプレイヤーキャラの小規模なものだが、PKギルドの急先鋒として名高い「八月一日」のリーダー。一対一でのPvPでの勝率八割を誇る、高額賞シールド金首。ただ、それだけ。よくいる熟練プレイヤーの一人だ。

だがそれであっても、木山幸にとっては、現実では不可能な、自分の内面をさらけ出した、現実の自分以上の『自分』だった。

自分が殺されたような虚脱感が彼を襲う。足元がふらふらとして、眩暈がする。自らのアイデンティティを、レゾンデートを確立できないう人間とはここまで不安定な者なのだろうか。脳裏に様々なゲームでの情景が思い浮かぶ。決してのどかな記憶ではなく、狙い狙われて過ごした気の抜けない日々。その最中。くぐもった吐息を吐きながら、ぼやけた頭で思考する。一体どこから間違ったのか。そんなことを考えていると、つい一ヶ月前、大敗というのも控えめなくらい打ちのめされた戦いを思い出した。仲間には止められ、しかし強行に決断したあの仕事。

その標的だったのは……「十七人の賢者」

そうだ。あいつだ。アイツらだ。間違いない。アレからいきなりに、急激に、雪だるま式に悪い方へと転がり落ちたのだ……仲間には裏切られ、BBSでは叩かれ、そして最後にはこんなふうになされた。そうだ。彼奴等が行けないんだ。アイツらが。アイツが!!!

「t、トリス……スメグ、ギス……スト、ス……パラケラ、すす……ばらけらすす!!!」

怒りに、か細い身体が震える。長らく使っていなかった声帯を震えさせ、軽く咽せる。頭の片隅にどこか引っかかるものが有ることは

分かったがそんなものは今は捨て置く。憤怒だ。全身の血液が氷水に変わったかのように冷え切った身体に、熱く黒いものが渦巻く。

「……っ」

骨の浮き出た拳で、パソコンを殴っていた。大きな音を立てただけだった。そしてそれを繰り返す。何度も。何度も。

カバーが外れて、軽い音を立ててカップヌードルのカラの中に落ちる。光学ドライブがひしゃげる。赤い滴が、ヌラヌラと垂れる。

基板がさらされて、CPUとファンが姿を表してもその拳止まらない。

「ア　　ッ!」

声にならない悲鳴と、骨とパーツがぶつかる歪な音が部屋の中に木霊して、部屋の中に満ちる。

マザーボードを殴って、皮が破けても止まらない。機械音を出して、パソコンがその機能を止める。

No Signal

そう表示されたディスプレイに、拳が当たる。亀裂が走り、光量を遙かに落とした部屋の中に歪な影が落ちる。打ち付ける度にその影は歪さを増し、そしてついには破碎音と共に、光量を失う。その瞬間。

ふと、目の前にも同じメッセージが表示されたような気がした。

見渡すかぎり、何も無い。最初にわかったのは、左右の反転した半角のカタカナ。ローマ字や算用記号、いつぞや本で見たヒエログリフらしきモノまで混じっている。そんな統一感のない歪な文字や記号の羅列が、黒い視界の中を走り回っている。速度も大きさも、ラウンド。

それ故に遠近感を感じられないため正確には分からないが、直感的に「大きな球体の真ん中に浮かんでいる」らしい。

そんなモノの中に、足元に何も無いというのに直立している。それなのに不思議と不安は感じない。それどころか、先ほどまでの寒気に似た感覚が徐々に溶けていくような気がした。

逆に奥の黒く渦巻くものはその熱量を増したようで、ひどく暑かった。

「ん？ ああ、起きた？ おはよう、お兄さん」

頭上から声がある。ひどく甘ったるく、しかし人のものと思えないぐらいに冷たい声。砂糖菓子で作ったナイフのようだ。

声の主を探すように視線を動かす。だが、見上げても見回しても視界に移るものは変わらない。分かったのは声の正体ではなく、ここが球ではなく円柱だということだけ。何の役にも立たない。

「ああ、こっちこっち。改めておはよう。お兄さん」

「だッ！？……誰だ、お前」

慌てて視界を前に戻す。声が出ることにまず驚いた幸の目の前には、少女がいた。酷く幼気な顔つきと、それ相応な身長。だが相反するような自己主張の激しい肢体。胸元と太もも大半が露出した衣装。それは、目のやり場に困るというようなものではない。暴力的とも言えた。全裸のほうがまだ健全だろう。つまりは、エロリ巨乳。

「…………グウレイト」

親指を立てて最大限の賞賛と感謝の言葉を口にすると、幸は後ろ向きに倒れこんで気絶した。

暗くなった視界がぼやけながら明るくなってくる。そこに広がるのは、古戦場。

懐かしく思ったのはほんの一瞬。その瞬間には「ありえない」と脳髓が否定する。違和感が郷愁にも似た感覚を、危うく自分の意識を飲み込もうとした感覚を駆逐する。

ありえない。

記憶にあると思うその瞬間は机に面してマウスとキーボードを操っていたはずだ。デジタルデータの並んだ画面をアイボールセンサーで読み込み、脳みそというコンピューターで逐一処理して最適な攻撃^{コマ}していたはずだ。

だというのに、風の匂いと汗のニオイと、そして血の臭いを鮮明に

思い出していた。三人称のはずだというのに、その光景を捉えているの視点が一人称だった。そしてただのデータだったはずのダメーシは、「痛み」へと変わっていた。

それは息を切らせて疾駆する赤。オーガストはその右手に握りなれた剣パヨネットを持ち、地衣する種々を蹴り飛ばしながら進んで行く。その前には、ゆうに五十を超える岩塊が影を落としている。

いや、特有の金属光沢と無骨で曖昧ながら四肢とも思える部位がある以上、見る者が見ればそれが人工物だと分かっただろう。それが形成される最中だと分かっただろう。

事実、その彫像は見る見るとその形を洗練化していく。

ゴーレム。

それはヘブライ語で「胎児」の意味を持つ泥の人形のはずだ。だが黄金の体を持ち、見上げるよりも高い背丈のそれはどう見てもアニメのロボットにしか見えなかった。emethをmethに変えた所そうだんとうつきよくあんでいてうごくだんで倒せそうもない。装甲筒付翼安定徹甲弾せいけいさくやくだんか成形炸薬弾を打ち込んだほうがまだ効くだろう。

その群れに剣の一振りで突き進んでいく。馬鹿だ。馬鹿だと思えない。大馬鹿だ。その状況もさることながら、何のバックアップも受けていないし、仲間の一人も居はしない。

だが、オーガストは、幸は止まらない。

「ッ！！！！」

彼がまさに一つの砲弾であるかのように。一発の銃弾であるかのよ

の錬金術師の顔だった。

そこで記憶の、記憶と思われるものの再生は終わった。またもや真っ暗になった視界の中で、血管の切れる音を聞いた。

「んああああーき、急にそんなああっ……おつきいい……んう、ん、ん、ううん、あっ、そこいい……ん？……起きた？再び改めて、おはよう、お兄さん」

……胸糞悪い憤怒が、一気に萎えかけた。代わりに、別のものが勃ち上がりそうだった。否、勃ち上がっていた。

「な、な、何してんだお前！」

「あん！……もう、乱暴だとモテないよ、お兄さん？ まあ、多少抵抗してくれたほうが気持ちいいけど」

「そんな事はどうでもいい、は、離せ！！」

着ていたTシャツをはだけさせられ、下半身にいたっては何も着ていない。その下半身に跨つてくぐもった声を上げている先ほどの少女。彼女が動かした際に、『何故かは分からないが』幸の身体に甘い快樂の波が押し寄せる。

気絶したと思ったら、女の子が……超能力とか魔法とか、そんなチヤチなもんじゃない。これは恐らくは現実だ。ポルナレフも真つ青だ。

そんな状態から抜け出ようと見を擦れども、ほとんど運動などしていなかった幸のガリガリな身体では身体の上に乗った少女すらどか

せない。それどころか、『何故かは分からないが』どんどん引き込まれていくようにすら感じる。必死の抵抗さえも些細な快感に変えられてしまうという屈辱的な状況で、しかし何もしない訳にもいかず身を振り続ける。まるで蟻地獄だ。無論双方の意味で。

「え、本当にどいてもいいの？」

「……いいから退け!!」

「あ、今一瞬迷ったでしょ？」

「ッ!!う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い!!」

年上の尊厳という、一応のちっぴけなプライドを傷つけられた幸。こうなったら一気に引き倒して抜け出すしか無い。そう思って、幸はその少ない筋肉に総動員を掛けて全身を攀じる。

「んんうあ!!……だから乱暴にしたらあ、はあ、ダメだっばあ……まあ、もうあんまり関係ないかもしれないけどね。お兄さんは」

そして、逆効果。だが急制動に驚いたのか、跨った少女は『何故かは分からないが』背筋をピンっと伸ばして痙攣する。そして『何故かは分からないが』とろけた瞳とほおけた表情、甘い吐息でこう告げた。

「もう死んじやってるし」

「何を、言って」

「死んじやっただよ、お兄さんは」

「死ん、だ……俺が」
「そう。お兄さんは死んじゃったの。頭の中の血管が、プチってな
っちゃって」

抱きつき、耳元でそう囁く彼女。押し付けられた大きな胸が、圧力
に負けてその形を変えている。酷く甘い匂いが、その言葉と同じよ
うに幸の思考に侵食してくる。

そう。死んだのだ。何も成せないまま、無為に、無意味に、無価値
に。

どのみち、あの生活の果てには遠からず死があっただろう。不
健康不健全極まりないのだから。非生産的かつ、反社会的とも言え
る。

それでも。

それでも、口惜しい。

だって、そうじゃないか。

現実でも何もかも失敗したんだ。小中高と虐められて、大学入試に
も失敗して、そして結局は引きこもりだ。

逃避で始めたネットゲーム。

時間をかければ強くなれるし、そこでは力があれば何とかなった。
なのに、そこでも潰されて、駆逐されて、追放された。

何なんだよ。何なんだよ、いったい。何でこうなっちゃまうんだよ。

黒く熱い感情が、またもや彼を支配する。先ほどまでの、明確な対
象のある憤怒とは違う。理不尽さを呪った、方向性のない怒りだ。
自らの行動というファクターを除外した、自分勝手な怒りとも言え
る。

その奔流に身を焦がしていると。

「だからね、おにいさん。お兄さんに、私がもう一回チャンスをあげようと思うの」

耳元にもう一度。擦るような声が響いた。

「どっついう、意味」

「そのまんまの意味だよ、お兄さん。お兄さんに、もう一回人生をあげる」

死者の蘇生。ありえないことを、彼女は平然と、まるで簡単なことのように言う。

「だって私は、一応神様だから。そしてここは、まだここは曖昧な世界だから。そして」

自らを神と定める。ありえないことを、彼女は平然と、まるで簡単なことのように言う。

「そしてお兄さんが、強い感情の持ち主だから……んっ……だよ」

彼女は立ち上がる。空いた隙間のせいか、幸は下半身が酷く冷たく感じた。

彼女のものなのかは分からないが、酷く淫靡な匂いが鼻を突く。クラクラとしそうなまでの濃い臭気の中で、脳みそだけが高速回転

しながら今の言葉の意味を噛み砕いていく。

生きかえる？ あの「木山幸」に？

「いやだ」

あんな惨めな存在に。

「嫌なの？」

あんな、毎度目の覚めるたびに自分であることを絶望するような存在に。

「いやだ。あの自分に戻るのはいやだ。嫌だ嫌だ嫌だ。嫌だ！！！」

「そっか。じゃあ、お兄さん」

先ほどまでの、娼婦のような笑ではない。慈愛に満ちた、聖母のような、そんな笑み。彼女の細い指が、握りしめて、鬱血した幸の拳を優しく包みこむ。

しかしその無償のような愛のなかに、ほんの少し含まれた毒針に幸が気付くことはない。

「『オーガスト』に、なってみる？」

「オーガスト、に？」

「そう。オーガストに。選んで。このまま死んでしまい消え果てる

か、それとも」

それは幸にとつて、願ってもないどころか最大の願望とも言えるような事項だった。

死んだらしいのであればどのみちもう蘇生は出来まい。もとより未練のない現世。それに比べて、いくら放逐された身であろうと、あれが彼の理想だったことは間違いない。

神様仏様ラヴクラフト様についてどうこう言えるほどの知識はないが、顧みる限り天国に行けるような行いはしていない。ならば。

「でもね、オーガストになるなら条件が有「飲んだ」……即決なんだね、お兄さん」

今度は驚かされたのは少女のほうだった。

「……そんな快諾されると、わざわざ寝こみを押し倒した意味がなくなっちゃうんだけど……わかった。さすがお兄さん。私が選んだだけはあるね。でも一応、説明だけはさせて」

幸の意思を汲み取ったのか、少女は丸くした目を再び細めて微笑む。本当ならば『既成事実』で幸を快楽の虜として使役するつもりだったのだが、その必要はなかったようだ。

そして細い指を三本立てて、右の手を幸の目の前に差し出した。

「条件は三つ。

まず一つ目。一番大事な条件。お兄さんの『復讐を完遂』すること。』敵を倒すこと』とも言えるかな？

次に、絶対に『怒り』を忘れないこと。絶対に。

そして最後の一つは、『成り果てる』こと。

期限はお兄さんが死んでしまうまで。よく考えてね、お兄さん。本当にコレでいい？』

「無論構わない」

そう告げながら、彼女は指を一本一本折り曲げる。説明しながら彼女の目が一瞬曇ったが、その事には幸は気付かない。いや、気付いていての結果は変わらなかっただろう。二の句を告げる前に頷く。今更どんな条件を提示されようとも構わないではないか。何を提示されようとも、幸の腹づもりは決まっていた。

考えなし、楽観的と、そう思えるかもしれない。復讐を完遂するというのはわかる。世の理不尽を壊せばいい。為すがままに行えばいいのだ。

では怒りを忘れるとどうなるのか。成り果てるとはどういう意味か。普段なら取引の条件を吟味するはずだ。

だが今はそんな些末事よりも、一刻も早く『彼』になりたかった。

その為にも確認した。

「倒すのは、誰なんだ？」

「私をここに閉じ込めた奴の、その手先。具体的にはわかんない。

だからお兄さんに探してもらおう必要があるんだ」

「……」

いきなりの難題だ。幸は、『New World』全体の規模を思い返す。一つの世界で、たった一人を探すのか？

だが、もしここで「そんな事は無理だ」などと言えばこの話もなくなってしまうのではないか。そう思って身構える。

「でも大丈夫。その為の力までなら、あげるから。それ以外はもう、私にはなにもできないけれど」

そして彼女は三本の指を立てた左手をつきだした。

「こっちも三つ。」

一つは、お兄さんの『記録』を『記憶』にしてあげる。

一つは、お兄さんを最後に「オーガスト」だった状態にしてあげる。もちろん、怪我とかは治して、ね。

そして最後の一つは、お兄さんが怒りを忘れない限り戦えるようにしてあげる。

いいかな？わかった？」

一つ目。つまりは、今までのゲームでの行動が、三人称視点でただ斜め上から見ているだけだった、メッセージを読みキーボードで打ち返していたそのログが実体験となるということ。

それはすなわち、あの世界の冒険が自らの礎となるということ。四年半の間、まともな睡眠時間を確保した日は数える程もない。『消されて』しまうまで様々なことがあった。現実では到底叶わない悦が、躍動が、鼓動が。現実世界ではありえないような痛みが、苦しみ、死が。それが、入ってくるということ。

二つ目。つまりは、あの古戦場。人里離れた高難易度ダンジョンの奥まったフィールド。そこに横たわる軀から始まるということか。傷は癒え、恐らく愛剣も元に戻っているのだろう。

三つ目。良くはわからない。だが、朽ち果てるまで暴れられるということなのだろう。ならば、片っ端からあたりを付けて殺戮すればいいじゃないか。オーガストとは、そんな男だった。

「それだけあれば十分だ」
「分かったよ、お兄さん」

幸はそう答え、少女はそう応えた。

そして少女は幸を突き飛ばす。無重力空間を慣性で流される宇宙飛行士のように、彼は音もなく流されて行く。

二人の瞳は会ったまま、そらされない。幸にも、なんとなくだがこの後どうなるのかが分かった気がした。

ココから始まるのだ。そしてここが別れなのだ。

そして。

ZORURURURURURURURURURURURURURURURU!!

奇妙な円柱の上方。幸と少女の頭上に黒い渦が生じた。渦と形容したのは、ちぎり取られたような不恰好な空間の断片が揺らぎ回転しているように思えたから。そこから巨大な口が迫り出す。その奥は見える限り、乱杭のように黄ばんだ犬歯が並んでいる。それが猛スピードで幸に迫る。

さすがにそれは。

「大丈夫お兄さん！痛みのは一瞬で、すぐにそんなモノ感じなくなるから！」

「聞いてねーよッ、それはあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

平泳ぎのように空間を掻いてみるも、もう身体は数センチも進まない。そんな下半身丸出しの男。

それを見て腹を抱えて笑う彼女。

先ほどまでの、若干シリアスな空気が台無しである。そして口に飲み込まれる寸前。再び彼女と目が合う。

またね、お兄さん。『気持ちいいこと』の続きは、お兄さんが死んだあとでしてアゲル。何時になるかは分からないけどね。ああ、少し残念なお知らせ、かな？実はまだ挿入^{はい}ってないからね。擦れてただけだから。じゃあね

そんな事を瞬く間のアイコンタクトで伝えられた気がした。なんつー長いアイコンタクトだよ。と、ツッコミまで入れたと思う。そこまでは律儀に返したと思うのだが、生憎と記憶として定着する前に、木山幸の脳髄は乱杭菌にすりつぶされてその機能を失っていた。

「……知ってる空だ」

気がつけば、視界いっぱいには小雨散る曇天。その色合いも寒さも、知っていると言つより「覚えている」という方が正しい。そう。覚えていたのだ。ここが何処で、ここで何を倒し、どうして息絶えたのか。

今だに消化吸収されて再構築された感覚の抜け切らない身体で、オーガストは古戦場のほぼ中央にぶっ倒れていた。

五感が感じる情報が違う。もはや木山幸の身体じゃない。突き刺さった愛剣に映る姿は、自らの理想。燃える色の揺らぐ髪に筋肉質の

プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願ひします。

その一（前書き）

一話分の展開は多分コレぐらいです。少ないでしょうが、できるだけ更新頻度を上げていきますのでどうかどうか皆様ご容赦の程を。あと、更新は土日以外は深夜になりますので、そこもどうかご容赦を……すみません。

ああ、この作品はどこぞの戦争根絶作品（00ではなく、ガンガンで連載してたほう）よろしく、この作品はラヴアンドピースアンドヴァイオレンスで成立しております。

もしくは、ラヴ（クラフト）アンドピース（クラフト）。

その一

「ツツ！！！！伏せてっ！！！！」

陽光が鏃に反射したのを、ふと視界の端に捉えた。

並走する追手のうちの数名がクロスボウを射構えているのを見て、エリオは後ろの幌馬車に声をかける。

麻の幌を貫通して数本の弓矢が街道の脇の林に消えた。

「怪我は！？二ーナ！？」「大丈夫！！」

変わらぬトーンニーナの妹の声を聞いて、一先ずは額の汗を拭う。額を拭う為ニーナに動かしたせいニーナか、血の滲んだ二の腕がピリリと傷んだ。

エリオは馬車の速度を落とさずに考える。

幌馬車が、いや、ボロ馬車が悪路に悲鳴を上げる。だが、速度を落とすわけにもいかない。状況は極めて悪い。この街道は直線で、この積荷の少ない馬車は二頭立てだ。まだ速度で優っているからいい。だが、あの峠から先は曲がりくねった道が続く。そこでは方向転換のために必然的に速度を落とさざるをえない。そうになると、追いつかれて捕まってしまうだろう。

退路を断つ様に浅いU字陣形で追って来られているため方向転換も出来やしない。これでは街に戻って自警団に助けをもらうこともできない。

最善の策としてはこのまま村まで逃げこむことだが、村人が総出で武器をとっても太刀打ち出来るかどうか……

今のうちに迎撃しようか。

否。自衛用のクロスボウはあるが、こんな状況では、冒険者でも

ない彼女にろくに中てられるはずがない。

別方向に逃げる？

無理だ。この先馬車の通れる道は殆ど無いから、どのみち此方にしか逃げられない。そうして、人気はどんどん無くなるだけ。助けなんてこない。

私がここで降りて、せめてニーナだけでも逃がすか？

ダメだ。あの子じゃまず馬車を運転できないし、第一私が降りてみたところで大して足止めできやしない。

どうするどうするどうする？八方塞がりだ。

じきに夜になる。このまま走らせれば馬たちも持たない。

どうする、どうする!？

「……………だりい、さみい……………おなかすいた」

背の高い、裸の針葉樹林。その合間を駆け抜けながらオーガストは周りを見回し探索していた。赤毛と褐色の肌が、非常に目立つ。

来たときは少しでもポーチの空き枠を作るために、別ウィンドウで攻略ウィキのマップページを開いてそれを辿って来た。それ故にマップをアイテムとして持ち合わせていなかったのだ。

彷徨つこと三日。ここ三日間の彼の移動方法は徒歩である。とはいっても、高級移動速度向上ポーションによって駿馬並の高速で移動している。古戦場を抜けるまではそうそう時間はかからなかった。高級移動速度向上ポーションによって、唯でさえ高い筋力パラメーターが上乘せされる。

それはによつて叩き出される高速度は快感だった。もちろん初体験ではない。だが記憶としてというのがと実体験では天と地ほどの差があった。

だがそれも、最初の一日までだった。慣らし運転の要領で体の動きを記憶と一致させていく。

己を知らば、なんとやら。

全力疾走しながらの技の行使、アイテムやアビリティの使用。それだけで目測数十本が切り倒されていた。

問題はそれからだった。そうして疲れはててから気がついたのだ。空腹と、そして食料品などのアイテムを持ち合わせていないことに当たり前だ。いくら覚えていたとしてもそれは仮想の世界でのもの。記憶のなかに食事をしたシーンはない。

閑散とした深秋の針葉樹林。葉もどんぐりも落ちたそこはタンパク源も炭水化物も少ないわけで。

もとより有ったとしても、調理の経験も記憶も無いし、現代っ子である彼には食べられなかつただろうが。

というわけで、絶賛人里搜索中だったのである。

「……ないなあ……」

そうしながら三日三晩も走り続ければ、それはもう疲れるし飽きるというもので。

肉体的な疲れというのは意外と感じないが、空腹には耐え難い。

転送用アイテムを持っていなかったというのは、単純に「うっかり」だったとしか言えなかった。

一刻も早くアングルの街に、あの薄暗く混沌とした悪の街に戻りたかった。第一、ポーシヨンなど一部のアイテムも枯渇している。その分の補充も、あの街じゃなければできない。そうやって黒い土と茶色い葉の上を歩き回ること更に二時間。

「ん？……あ、おお、おおお！！！！」

やっと、人の匂いのする小道にたどり着いた。多少荒れているが、間違いなく人の手に入った街道。これを辿れば、間違いなく街が、それでなくとも村が有るはず！

夢中で駆け出し街道に飛び出す。ああ、文明の香りがする。これならば、人里も遠くはないはず。その有難味に酔いしれる。

「っしやああああああああ！！！！」

「ッ！！！！」

声にならない声まで上げて、両手を振り上げる。ははは、踊り出しそう。有頂天になって曇天を見上げる。脳裏に、何もかもかき消すような荘厳なファンファーレが鳴り響く。

それが不注意だった。

「ッ！！！！？ 退いて退いて退いてえ！！！！」

振り返る間も無く、街道の固く踏み固められた土にキスをする。
新世界での人間とのファーストコンタクトは、轢く轢かれるという衝撃的なものだった。

「ッ！！？ 退いて退いて退いてえ！！」

車は急には止まれない

まして、ブレーキもない馬車は咄嗟には止まれない。丸太を踏み越えた時のような衝撃を感じながら馬たちを制すると、幌の中から二ノナが飛び出してきた。幅広の帽子から綺麗な金色の髪が覗いている。

「姉さん！！」

「バカ、後ろにいなさい！私は大丈夫、何とも無いから！」

「きゃっ！！」

御者席の姉が妹を幌に押しこむ。

そのせいで、塞がりかけていた傷口が開いた。ピリピリとする痛みに耐えながら手綱を引き、止まってしまった馬車をもう一度動かそうとする。

だが。

「おっと、待ってもらおうか姉ちゃん？」

「積んでる金と今押し込んだネーちゃん、頂いていこうかあ？」

下卑た笑いを浮かべた男が二人。進路は既に塞がれていた。

それどころか、馬車の周囲は追手に、馬に乗った山賊団に囲まれていた。

「離せ、離せよっ！ニーナっ！」

「きゃああああ！」

「ニーナアア！！！」

地面に押し付けられたエリオ。頬も黒い髪も土で汚れている。その目の前で、幌馬車から妹が、ニーナが引っ張り出される。

「おう、やつぱり上玉じゃねーか、ああ？」

「へへ、良い身体だあ、高く売れるぜえ」

「ひうつ！？」

「おいおい手え出すなよ？商品価値が下がる」

姉と違って発育のいい胸を盗賊の一人が掴む。背後に両手を縛られない。恐怖と羞恥で体をこわばらせている彼女には身を擦ることしか出来ない。その拍子に彼女の頭に被さったつば広の帽子が落ちる。そこにあつたのは、人並み外れた流麗な美貌。そして。

「ニーナに触るなあああ！」

『^{エルフ}尖った耳』だった。

じゃあ、こっち剥いちまいますぜ？

好きにしる。そんなガキみたいな女はどうせ売れねえし、ヤッチまっても変わらん。

へへ、じゃあ……

や、やめ、キヤアアあああああ！！！！

姉さん！姉さあああん！

「へ、まったく。あんなガキみたいな女ひん剥いて何が楽しんだか……おい、サップ。何だそいつは？」

まだ生え揃ってもないじゃないか。そんなような、自分の娘って言ってもおかしくないようなエリオの裸体を視界の端に捉えて、ゴツチは目を背けた。と、その視線の先には同僚がしゃがみこんでいる。

「ん？ああ、ゴツチ。なんか轢かれてたんだよお、こいつ。けつこー値の張りそうなモン着てっからよお、剥いで売っちまおうぜ？」

「お、いいな。兄貴達には？」

「もちろん言わねえ！」

「……だっはっはっはっは！！」「」

でっぷりと太ったサップと、それとは対照的にガリガリのゴツチ。

二人はエリオやニーナには目もくれず、轢かれた長身の男に目を向けていた。

二人はしゃがんで、小声でそう呟きあう。豪快に笑っているように見せて、ここまでの会話も実は小声で行われていた。

無論、バレるのが怖いからである。

二人は、間違っても同性愛者ではないが、かと言ってあんな年端も行かない様な体型をひん剥いてイチモツおっ勃てる様な変態じゃない。

ならば日銭になるような稼ぎを狙って酒を買ったほうが利口というものだ。

さて、コイツから金目のモンを剥ぎ取るか。

何処の誰かは知らないが、こんな鎧を着てるなら結構な金目のモンを持っていそうだ。

コレがゲームではちゃんと機能するのだが、生憎とこれは現実。馬車に轢かれて全身を強打すれば、それはもちろん覆われていない部分も打ち付けるわけで。非常に痛い。

「あああああああああああああ！！！！！！！」

オーガストは、まるでギャグマンガのキャラクターのような恰好で地面に突っ伏していた。彼の頭と背中にはくつきりとした轍が刻まれていた。そんな中、身体を変な男二人組にまさぐられていた。イカくさい手で、自慢の装備にベタベタと指紋を付けられた。怒りのボルテージに上昇していく。

だが同時に、嬉しさも込み上げていく。

不条理、理不尽を敵に回した身の上であるなだから。コレほど早く、コレほど迅速に、コレほど身近な、復讐のチャンスが巡ってくるとは。

いいだろう。やってやるうではないか。コレが復讐の第一歩だ。

現状を確認すると、自然と両手に力が入った。口からため息と一緒に、心境が漏れ出す。と同時に、沸騰したアドレナリンのなかに投げ込まれたように脳髓がトツギアに入る。

交感神経が高ぶり、心臓の拍動数が急速に上昇し、身体が戦闘状態に移行する。

そうだ。形振り構わず『気にせずに』さっさと憂さを晴らしてしまおう。さあ復讐だ。

「理不尽だ」

酷く痛む。特に顔面。やっとの思いで地面とのディープキスを振り切ると、付着したパラパラザラザラと砂粒と礫が落ちる。膝を立ててグイイと腰を上げる。尻を突き出す形でみっともないが、握ったものを離さずに体制を立て直すにはコレしか無い。そこから曲げた

ろう。彼らの生死はともかくとして、実用可という意味で。比較的離れた場所に立つ二人が弓を構えた。先の白豚打撃サブインパクトのために動きが止まっているからだろう。オーガストはその即応性に感心する。頭目の様な男を始めとして、他の者などまだ剣すら抜いていないのに。
そんな事を確認するやいなや、風切り音を上げて矢が飛来する。

(ん?)

反応した。確認までした。が、それでもなお律儀レイギに振り切った体制から動かない自分の身体。認識のギャップに戸惑いながらも、危なげ無く二本の矢を両方の剣で絡めとる。彼はそこで、あることに気がついた。

肉に鏃が食い込む生々しい音と感触した。一応確認すると急所にあたってるのはゴツチだけ。喉に刺さった矢が脈と一緒に動いている。応じて、オーガストの髪よりも赤い鮮血が辺りを濡らしている。恐らくは動脈血。

一方の白はというと。厚い脂肪に刺さっているため出血は少ないが、もし鏃に毒でも塗つていればサップも危ないだろう。だが、そんな些細なことは『気にしない』。

第二射を構えている間に、一挙手の距離にいた一人を黒い方の剣で殴り落とす。白い方に比べてこちらのほうが二十センチほどリーチが長い。その分、多少の遠心力を込めて振り下ろされる。

「なっ!?!」

狙われた方もまさか振り下ろされる味方を剣で受けるわけにもいかず、どうしようかと悩む間に昏倒させられていた。初期装備で持たされそうな、しかし年季の入った鉄の剣がカランと音を立てて落ちる。

残り六人のうち、頭目を含めた四人は女の近くターゲットにいる。弓を持った二人は、十字砲火の出来るように左右に離れた場所にいる。

どちらにしても一投足で届く距離ではない。さて、どうするか。

脅威度は弓使いのほうが上。加えて、オーガストの気付いた仮説が正しければ固まった四人の相手には簡単だろう。

ならば遠距離から仕留める他はない。だが、生憎と下記のたぐいも、遠距離攻撃得きるような魔法の一つも、オーガストは持ってはいない。

ならば飛ばせるものを飛ばせばいい。

ソードマスターがソードマスターである所以たるものを。

「つつつらあああああああ!!!」

やはり毒が塗ってあったのか。痙攣して口から泡を吐く白い巨体と、急速に体温を失い出した黒い瘦身を、オーガストはその膂力に任せ、振り切った。狙いは無論、二人の弓使いである。二つの切っ先^{あたま}が、一定の速度を超えた時。

風切り音を上げて、紫電を纏った二本の斬撃が複合弓ごとその使用者をぶった切った。

その一（後書き）

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願ひします。

その二。(前書き)

前回更新分とその前を統合しました。多分、一回に五千字行かないときはそれぐらいに成るように調節して統合、分離すると思います。すみません。

その二。

カマイタチ
オーラブレイク。遠近の両方で最大火力を叩き出せる、紫電を纏つた飛ぶ斬撃。
ソードファイター
剣闘士をそれ足らしめる、そしてその上級職たる剣導師を対人戦闘
ソードマスター
最高勝率の職足らしめる技。

それは記憶にあるとおり。彼の覚えているとおり。最高の切れ味で役目を果たした。

鮮血を上げて倒れる二人の弓使いを見て、オーガストは更に追い打ちをかける。

エリオ
目標はすぐそこにいる。服を剥がされて、へたり込んでいる。あと少しであの喉元にコレを……

「ちいいいッ!」

そこで気がつく。手に持った肉塊はもうボロボロだ。カマイタチを使うとなれば、切っ先の速度は軽く音速を超える。

手に持った剣は、その負荷からか切っ先が首のあたりからちぎれて弓使いの辺りまで跳んでいた。よく見れば全身が余波でボロボロだ。コレではまともに叩き潰せない。轢き潰せない。ましてや、切れない。それならば。

装備を放棄。濡れた肉が地面を叩く。軽い手付きでそれらを投げ捨て、彼らの腰に佩かれた鉄の剣を抜く。

頭の上半分が潰れて痙攣するそれには目もくれずに、助走をつけて全力で投げつけた。

小気味いい、包丁をスイカにさした時のような音。それとともに掴まれていた腕が放されて、ニーナは尻餅をついた。何故そうなったのか。振り返りつつ見上げると。

「う、うわあ……うわあああああ……！！！！」

さっきまで腕を掴んでいた男が、樹の幹に腕を剣で縫いつけられていた。柄の部分を掴み、必死に引き抜こうとしているがビクともしない。もがけばもがくほどに血管を傷つけて出血量を増している。そこに視線を向けているのは彼女一人ではない。彼女の姉も、そして山賊たちも、啞然としてその様子を見ている。

「ひっ！」

喉がひきつる。頬に、生暖かい飛沫が飛んできたから。赤い、鉄の匂いのする飛沫。

「……うわあああああああああああ……！！！！」

彼女の声がかきつけかけとなって、堰を切ったように残りの三人が逃げ出した。なりふり構わず、屈強な男がそれぞれの馬のもとに走っていった。

立ち向かえば、最悪死ぬ。そうでなくとも、再起不能なまでに駆逐され蹂躪されて捨てられる。今あの斬撃が走れば助かる見込みはな

い。切断面で体の半分とはさようならだ。

一縷の望みを掛けて彼らは逃走する。

素直に逃げた二人。彼らは運が良かった。それはオーガストに危害を加えずに、そして彼のターゲットに手を出さずに逃げるという選択をしていたから。そして負傷し木に縫いつけられた仲間を見放したから。

少なくとも、弓を構えた二人は死んでいたことはいい方向に働いていた。もしあの二人が生きて逃走を図っていたなら、仲間諸共今頃真っ二つになっていただろう。

運が悪かったのは残りの二人。

「ちっ、おい、来い！」

「なっ、離せ、離せよ！」

男はターゲットの二の腕を掴み、そしてへたり込んだニーナはにも手を出そうとしていた。せめてこの目的のブツだけでも。

「おい、置いていくなよ……おい、おおおおいいいいいいいい！！！！！！！！」

男は赤一を吹き出し続ける剣を抜こうとしていた。色合いから見ても動脈血。量から見ても失血して死に至るまで十数分とかからないだろうに、藻掻く。

そして、先に逃げた男たちの乗った馬の蹄の音が遠ざかる。それに反比例するように重い足音が近づいてくる。その音が、姉妹の耳に

響いていた。

「ははは、くはははは、くかははははは、おい、お前、ははは、
そこのお前」

声。薄ぺつらく軽い。

赤く短い髪の毛、長身の男が笑いながら近づいて来る。

腕を刺されている男の流した血溜まりを踏めるような近距離まで。

ニーナの視界が、赤く染まっている。

ただ両腕が真っ赤なだけだというのに、全身に返り血を浴びたよう
な血生臭さににおいを振りまいている。

赤く濡れて指をさす。

「大丈夫か、ははははは」

指刺されたのは、へたり込んだニーナ。

「え、あ、は、はい」

彼女は無傷だ。地面に尻餅を着いているし、返り血でところどころ
に赤黒いシミを作っているが、身体に与えられたのは不快感のみで、
傷はない。

返答から症状を推し量ると、興味をなくしたように視線を戻す。そ
の先には、エリオと一人の男が。

そのまま男を押し倒す。同時に男の剣を投げ飛ばすと、傷ついた拳を握り締める。最早彼の目には、エリオの姿は目標として捉えられていない。

馬乗りになつて、あとは拳を振り下ろすだけだ。蛮力を込め、硬度は最早岩石に近いその拳を。

ギチギチギリギリと、表皮を破らんばかりに引き絞られた筋肉が、その拳骨ハンマーヘッドを加速させる。

そこからは、文字通り「血沸き肉踊る」屠殺劇だった。

街道に、一通り肉と骨とがぶつかり潰れる音が響き渡った後、ゆらりとオーガストは立ち上がった。足元には、先ほどまで人類だった肉塊が半ばまで地面に埋まっている。

「ふう……………ッ！」

思う存分、肩で息をするまでいたぶり続けた。

一通り溜飲を下げたのか、荒げた息をついて、ハッと気付く。なんだこれは。なんだこれは。なんなのだコレはッ！！！！

真っ赤だった表面が半ば黒々とした色に変わり、駅と言うよりも固形物に近い質感となった返り血塗れの拳。それを、思いつきり自らの顔面に叩きつける。

物言わぬ男の傍らにあった剣を抜く。自由落下で柄を上にして落ちたそれは、何の抵抗もなくアッサリと抜ける。

「あ、あの、お兄さん」

握グリップりを確認し、二三度握り直す。

「すみません、き、聞こえていますか？」

柄に巻かれた牛皮が握力にギチギチと鳴る。まあ、一回なら持つだろう。構えて、力を伝える。そして

「あのー、すみま「チエエエストオ！」

風切り音、そして木切音。街道沿いの、比較的太い木を一振りで切り落とす。断面に綺麗な年輪を浮かべたそれが倒れると同時に、手に持った剣も半ばから折れる。

やはり、まだまだ。いやそんなモノじゃない。全然だ。そう、思案している。

「あのー！」

後ろからやかましい声が聞こえる。こんな声の輩はいただろうか、と思いつく。そうすると、先ほどまでターゲットとしていた女と、返り血に汚れた女がいたということを出す。

今から殺すか、と思つて、いや、いや、と思いとどまる。いきなり轢かれるという理不尽の分の仕返しはこの男どもに十分に行つた上に、大事なことに気がつくチャンスを得たのだ。

ならば殺すこともないだろう。むしろ、無下には扱えまい。ならば、それなりの対応をしよう。

「何だ、五月蠅……い……」

そう思い、声の側に振り返ると。

そこにいたのは返り値に汚れていた女のほう。血みどろの愉悦に満ちた戦いを見せられておいて、声は明るい。タフだ。だが、オーガストの言葉を止めたのはそこではなかった。

目の前の女の肩越し。そこから見える、半裸の女。

元々脱がされたかけていた所を、更に服を破いてしまったのだ。露出度は高い。視線に気がついたのか、惨劇に青ざめた頬をに血の気

が指す。赤らめている、ということか。

「な、なんだよ」

元々は引きこもりだ。ゲームと記憶で血潮と臓物は見慣れていても、異性のあられもない姿は……

以前自分を助けてくれた神を見た時のように、再び後ろに倒れて、オーガストは意識を手放した。

その二。(後書き)

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2720z/>

New World 外伝 『Another World』

2011年12月23日02時51分発行